

スケトウダラオホーツク海南部 研究機関会議結果



国立研究開発法人 水産研究・教育機構

1

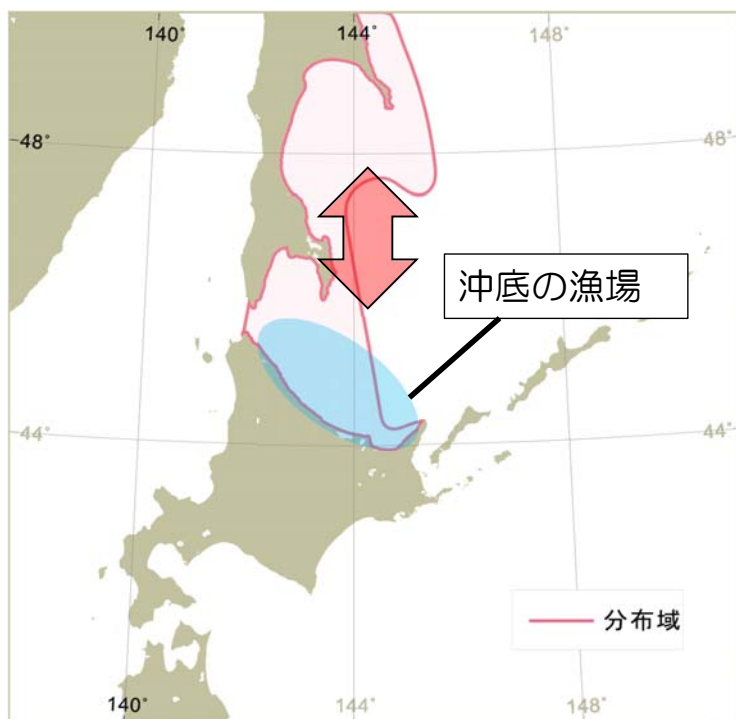
内容



1. スケトウダラオホーツク海南部の資源評価結果
2. 資源管理目標等を導入した「新たな資源評価」について
3. スケトウダラオホーツク海南部の漁獲管理規則等の提案について

2

スケトウダラオホーツク海南部の分布・回遊状況



分布海域

- 北海道オホーツク海側～サハリン東岸に連続的に分布

産卵場

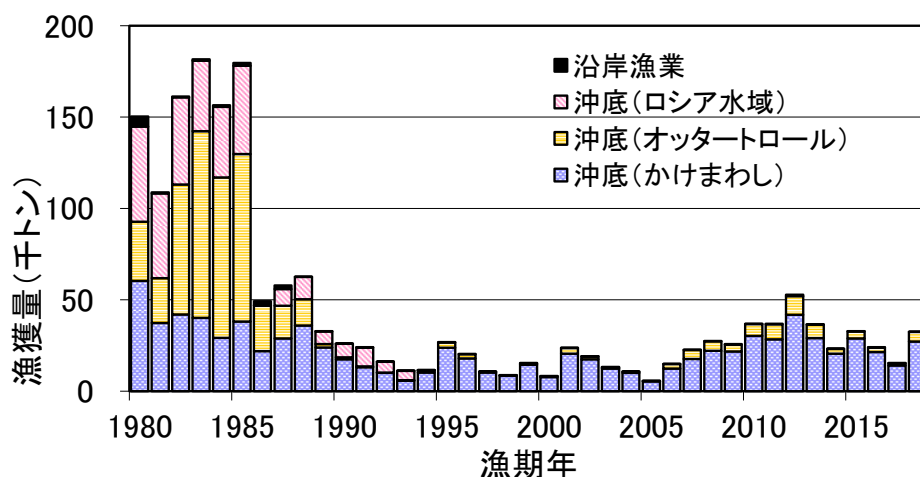
- 北見大和堆～宗谷地方沿岸及びテルペニア湾周辺と推定されているが、1990年代以降、北見大和堆周辺では明確な産卵群は確認されておらず詳細は不明
- 産卵期は3～5月

移動・回遊等

- 現在は日本水域において主産卵場が確認されておらず、他の海域で発生し、成長のため一時的に来遊した群が漁獲の主体と考えられる。

3

漁獲量の推移

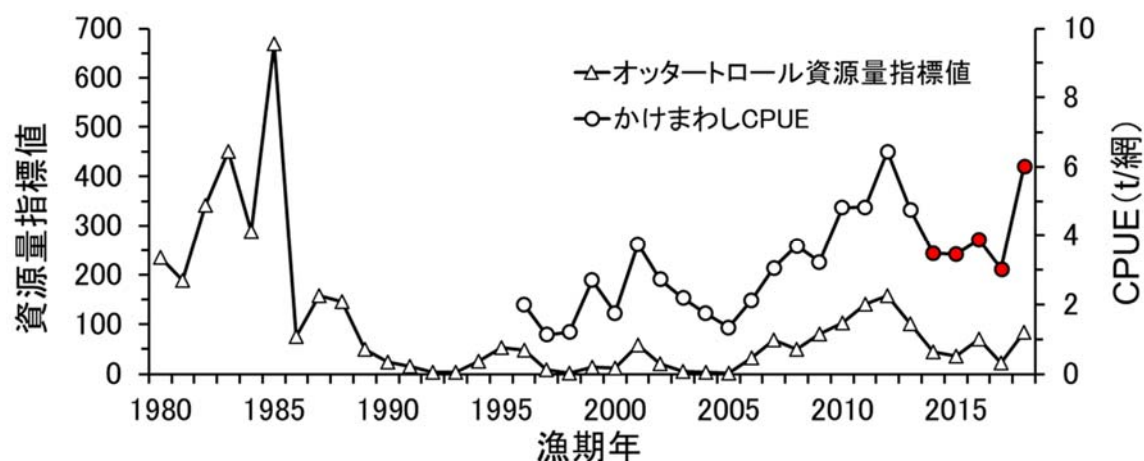


漁期は、
4月～翌年3月

- 漁獲量の大部分は、沖底（かけまわし・オットートロール）による。
- 漁獲量は、1980年代前半までは概ね15万トン前後で推移したが、ソ連（ロシア）水域の漁獲規制強化等で1986年漁期に大きく減少した。
- 1990～2009年漁期は増減を繰り返しながら3万トン以下で推移した。
- 2006年漁期から増加傾向を示したが、2013年漁期以降は緩やかに減少した。
- 2018年漁期は再び増加し、3.3万トンであった。

4

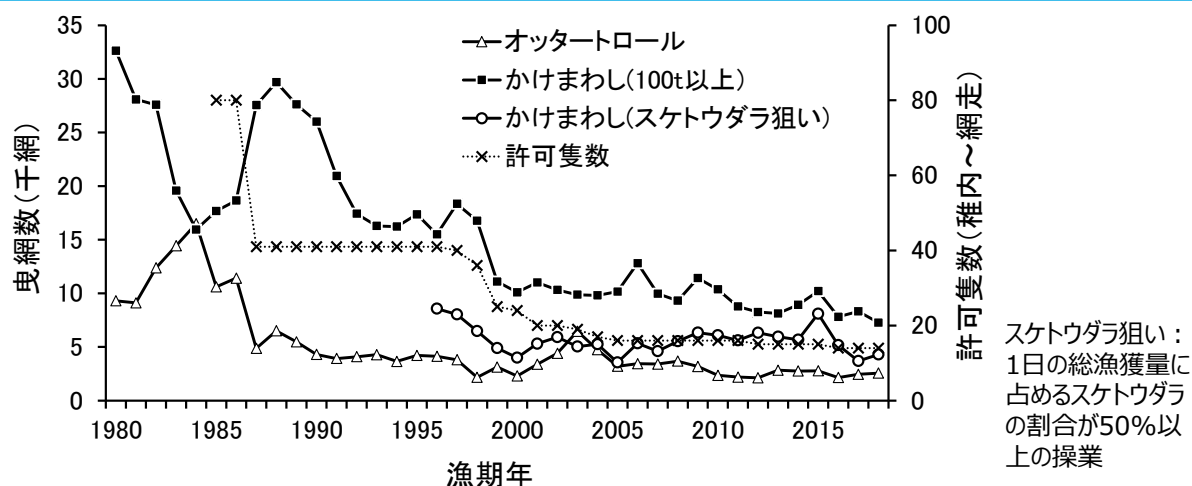
資源量指標値の推移



- 資源量指標値は、かけまわしCPUEとオッターロール資源量指標値を用いる。
- 近年の漁獲主体であるかけまわしのCPUEは、1996～2005年漁期までは増減はあるものの1.1～3.7トン/網の低い水準で推移していた。
- 2006～2012年漁期に増加したのち、2013年漁期以降、減少傾向となった。
- 2018年漁期は6.0トン/網に上昇し、2000年漁期以降では2番目に高い水準となった。

5

漁獲努力量の推移



- 漁獲努力量は沖底の曳網数で評価
- オッターロールの曳網数は、1984年漁期には16.5千網であったがその後大きく減少し、1998年漁期以降は2002～2004年漁期などを除き2千～3千網台で推移している。
- 近年の漁獲主体であるかけまわしの網数も減少しているが、1999年漁期以降は概ね10千網前後で推移している。
- このうち、スケトウダラ狙いの曳網数は、2000～2014年漁期には3.6千～6.3千網で推移し、2015年漁期にこれらを大きく上回る8.1千網となったが、その後減少し、2018年漁期は4.3千網であった。

6

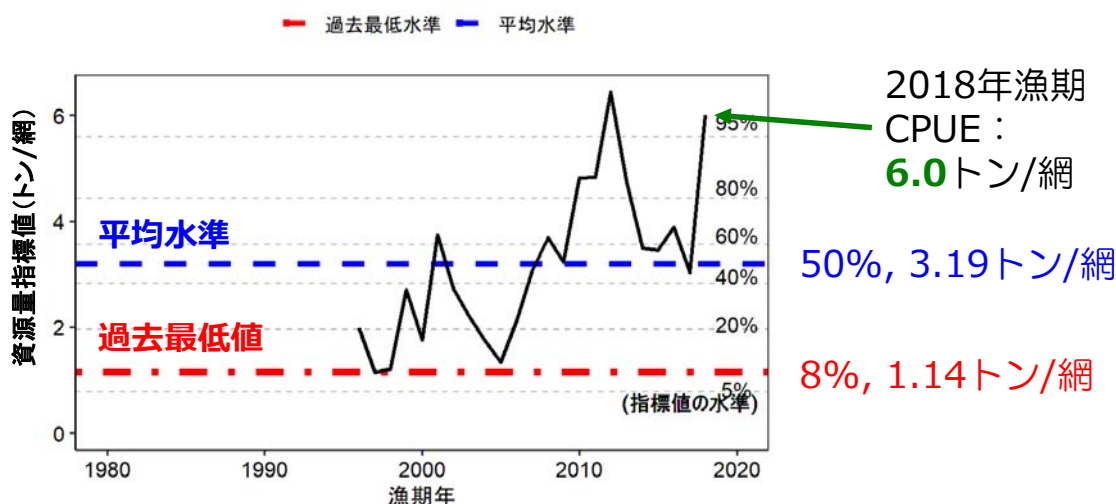
漁獲管理規則等の提案について

- 本資源はロシア水域と日本水域に連続的に跨って分布し、現状で日本水域内に主産卵場の形成が確認されていないことから、**生活史の一時期に日本水域に来遊する**と想定される。
- ロシア水域内での本資源の再生産や加入、漁獲状況に関する情報は限定的であり、既存の情報からは漁獲圧や資源量などを定量的に評価することが難しい。

「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される**管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。**

本資源では、来遊量の年変動に配慮しながら漁獲を管理することが重要である。

資源管理方針に関する検討のための代替値



- 資源量指標値（近年の漁獲主体であるかけまわしCPUEを選択）を資源の来遊量の指標と考えて、その資源量指標値に累積正規分布を適用して算出された「平均水準」、「過去最低値」を評価の基準にすることを提案する。
- **平均水準**は、資源量指標値の50%水準で3.19（トン/網）
- **過去最低値**は、資源量指標値の8%水準で1.14（トン/網）
- 2018年漁期の資源量指標値は、**平均水準を大きく上回る。**